恋 愛 と 人 格

――その西欧的かたち――

大 森 正 樹 （南山短期大学教授）

映画やＴＶドラマを見れば、そこに愛が語られ、コマーシャルには人と地球へのやさしさが映し出され、教育や老人福祉の場でも愛の必要性が説かれ、キリスト教の教会の説教壇からは、神の愛が声高らかに宣言される。至る所、愛という言葉が溢れている。まことに現代人は「愛」に食傷しかねない。

しかしこれ程日常化した「愛」という言葉をわれわれは自家薬籠中のものとして用いているであろうか。言葉として用いているのであるから、当然その意味はわかっているはずだし、それを自在に使っているのは当たり前のはずである。だのにどうしてこういう聞き方をするのであろうか。それこそ何か思い上がった問いではないであろうか。

そうではない。このようなことを聞くのは、「愛」という言葉が、それが漢語由来のものであるということは勿論、現在使用されている意味内容は、外来のものであるからである。因みに、諸橋他著『廣漢和辞典』中巻の「愛」の項を引いてみると、いわゆる、「愛する」という意味では、「情をかける」、「あわれむ」、「親しむ」、「かわいがる」、「慕う」、「恋する」ということであり、その他「めでる」、「おしむ」が挙げられ、仏教用語として、十二因縁の一で、五官上の欲を貪り求めることとあり、更にキリスト教で用いるとなっている。つまり、大雑把に言って、「愛」はある者・物に向けてのやさしい心持ちであり、その心でめで、またそれがなくなることを惜しむ。その他、それが人間同士、とくに異性間に適用されると恋情となり、仏教的には愛欲であって、これは避けるべき煩悩となる。更に、これとは全く逆のキリスト教の神の愛、つまり人が行なわなければならない徳行を数え上げている。このことからしても、「愛」という言葉は極めてやっかいな問題を孕んでいるものだ、ということが想像できる。即ち、われわれがこの言葉を使用するとき、そこに一種の嗅覚ともいうべき、勘を働かせて、その微妙な意味あいを捉え、意志を互いに疎通しあって

いるのだ。それはこの言葉がある人為的な操作を経たものであることによる。つまり日本では男女間の情愛を示す言葉はもともとは愛ではなく、「想う」であったこと[1]、他方仏教では既に見たごとく、愛は愛欲であり、性愛であった。それゆえにキリシタンは神の愛という意味を「でうすの御大切」と言い、愛を避けたとされる[2]（しかし、愛という言葉は使われているのであって、例えば、『どちりなきりしたん』第六、「・・・あしきと思ふ事をきらひ、ものをあいするせい」[3]）。男女関係の特徴を表すものは、「惚れる」や「慕ふ」、「恋ふる」、「想ふ」であった。その限り言葉とそれが指し示している内容の間には大きなズレはなかったのである。ところが明治以降、西欧の文物とともに「愛」という言葉も移入され、先に挙げたいくつかの意味をこの一つの言葉のうちに内包してしまい、今日に至っている。ただし、この西欧移入の「愛」という言葉の背後には西欧が長時間かけて到達した「個人・人格」の概念が含まれているのであることは、阿部の指摘するところである[4]。

ではこの指摘に支えられて、「愛」という問題を、男女間のものに限って話を進めていこう。繰り返しになるが、われわれが現今用いる愛という言葉の中には、人間同士のある細やかな情感や性愛の他に、神と人、そしてそこから導かれる人と人との間のいわばキリスト教的な意味での愛も含まれていることは忘れてはならない。

ところで西欧では「個人」や「人格」という考えはずっと昔から、いやいやそもそもの始まりから存在していたというように思いがちだが、実は西欧の古代や中世初期の頃は、案外と東洋に近い考え方をしており、結婚なども家と家との結びつき、家族を増やして、家の力を増強させることに重きが置かれていたらしい。それがやっと十二世紀になって、「個人」や「人格」の概念が成立してくるのである[5]。この十二世紀ルネサンスと呼ばれる時代に、精神史の上でも大きな変化があったことは大変興味深い。個人意識の発生に1215年の第四回ラテラノ公会議で、年に少なくとも一度は告解をすることが義務づけられたことが大きなインパクトを与えたというM・フーコーの指摘は重要であろう[6]。しかしここではそのことは他書に譲り、十二・十三世紀になってやっと成立してきた個人や人格の概念が以降の西欧の精神構造を決定していったことに注目したい。この個人・人格の概念が成立してくるとともに、男女の愛も、個人を離れた家の存続ということではなく、個人である一人の男と一人の女の間の実存の問題となってくる。男女の愛が西欧において一つの場を正当に占めるようになった経緯については、吟遊詩人と言われるトゥルバドゥールの活躍や、このトゥルバドゥールには実はアラブの詩歌が影響しているという面白い研究があるが、これも他書を見られたい[7]。

個人といい、人格といい、それは西欧が古代以来の人間への考察と、キリスト教という宗教の目指すところの探究と、人間そのものが希求する生の根本的あり方を総合して、様々の外的影響を俟って成立してきたものであった。だか

ら一口に個人や人格と言っても、その言葉の裏には実に長い間の、そして実に深い人間性の渇望があったのであるが、しかし、かと言って、男女間の愛がそのまま、まっすぐに、どこからの反撥もなく育っていったのではない。特に男女の性の営みに関しては、これは現今の日本では想像もできないような禁止事項が渦巻いていたのである[8]。一方に台頭してくる人格をもった男女の結合があり、他方ではその結合の性的側面を規制する厳格な教会の掟が存した。教会の掟ということは、そこに常に神の法との関係が前提されており、人間同士の性関係に絶対者が介入していることを意味している。このことは西欧の男女の愛のかたちの形成を考える上で決して見逃しえない事実である。それは人間の根源的欲求としての男女の精神と肉の結合はそう簡単には手にはいらなかったということであり、その獲得のためには大きな闘いを要したということだ。

これに対し、日本においては万葉に見られる相聞歌のおおらかさがあったと言われる。それがある意味で軸となり、仏教による愛欲への戒めや儒教による男女間の規定の強化がありながらも、人が生きていく過程で性は人間を越える絶対者との関係で規制されることはなかった。だから王朝時代の貴族たちの華麗な絵巻の中には、仏教や儒教の影響は仄かに見えながらも、もののあはれの情感が人間関係を覆い尽くし、絶対者が介入してくる規制の存する余地はなかった。「源氏」を経て、その王朝物語の頽落の一つの極みに『問はず語り』は位置するだろうが、そこからは一人のサド公爵も生まれてはいない。

人間である以上、異性をいとおしみ、やさしい情感を感じ、相手を好ましく思い、共にありたいと望むことに変わりはないはずである。ところが森有正などは「日本人には真の恋愛も困難・・・日本人はほんとうの恋愛が非常に少ない・・・ほんとうの恋愛というものは、どうしても日本では成立しにくい」[9]と言う。これに対してはそんなことはない、日本でも古来から男女の愛の物語は数多くあり、その多くに読者は心動かされ、そこに愛のあることを感じ、また現実に多くの男女が出会い、恋愛している、と反論が出るであろう。日本人の恋愛のどこがほんとうの恋愛ではないのか。森が永くフランスにいたため、フランスにかぶれた結果が先の発言ではないのか。多くの人はそう詰め寄りもしよう。

しかし森の言い分はこうであろう。男女の愛とは、完全な意味で孤独である男と女の間に成立するものである。孤独であるとは、誰も自分を顧みてくれるものがなくて、淋しく、せつなく、やるせない状況を言うのではない。それは何をするのでも自分で判断し、たとえ人に相談することがあっても、決断は必ず自分一人がするのである。様々な知識や助言や慣習やは、なるほど参考にはなるが、しかし、最終の決断は自分が下し、そこから生起するあらゆる結果は自分の責任において果たすのである。その人は誰それの子供でも、〇〇会社の社員でも、〇〇大学の学生でもない。それはその人でしかない。そういう二人の間にこそ、本当の恋愛は成立する。しかも恋愛している当人たちは、それぞ

れの問題を抱えているわけだが、その問題は各人が解決するのであって（勿論二人にとっての問題なら二人で）、決して一方が他方の代わりにそれに手を出すということはない。これに対して、日本では、二人の男女の恋愛の場に、すぐに、親、兄弟姉妹、教師、親戚、上司、友人といったものが顔を出してくる。親は子供の恋愛を静観できず、つい口を出してしまう。当人同士が解決すべきものを肩代わりしてしまう。このようにいわば集団の中で、あるときは二人を包み込むような雰囲気の中で、またあるときは二人を非難するような雰囲気の中で、一つの集団の出来事として恋愛は進んでいく。

『トリコロール－青の愛』というフランス映画を観た。近ごろこの種の映画を観ると、男性はどこに行ったのかと思う。男性はどこで活躍するのか。戦争でか、冒険でか、活劇でか、そういう所でしか男性は用がないのか。考えて見れば、そのようなものは、どれもこれもつまらぬものばかりである。――自動車事故で夫と子供をいっぺんに失ったヒロインが、自身瀕死の重傷を負いながら、回復したあと、（一度は、自死をも試みる）貴族であった夫の家を出、全く一人の生活を営もうとする。パリへ出て、そこで自分の住むアパルトマンを探す。一人の無名の人間として。夫は有名な作曲家であった。その保護から外れて、一人で街の中で生きる。夫に愛人がいたことを知ったとき、それなりの嫉妬と怒りと無念さを感ずるが、その愛人に子供ができたことを知ると、夫の家と名を継ぐよう譲り、それを放棄する。そして、自分そのものに目を向け、己れに問うた末、以前から自分を好ましく思っていた夫の協力者の愛を受け入れる決断をする。これだけのことだが、このヒロインはそれらのことを実にきっぱりと、また決然として行なう。それはあっぱれと言う他はない。――古来、男はきっぱりとしていたのではなかったか。

一方では乾いた情感の中であくまで個を貫くことで生きようとする姿勢、他方は湿った、連帯的な結合の真綿の中で、個を意識することなく、互いが互いの中に入りこみ、互いを頼りにして生きている。男と女が出会い、魅かれあって、その情熱を燃え上がらせていることが、洋の東西で異なったものとなるのであろうか。愛の質が異なるのであろうか。確かに男女間に生じるいわば本能的な部分が異なるということはない。それは既に触れたように、どこの地域の男女にあっても同じことである。従って、日本では恋愛が成立しないという言に、いきり立つ必要はあるまい。それよりも問題は「ほんとうの」というところである。この「ほんとうの」とは一体何なのか。恋愛は成立していても、それは本物ではないということか。確かに、恋愛感情は成立している。しかし、「ほんとうの」ものではない、と森は言わんとしている。それは森の中に人というのはどこまでも一個の独立した人間であって、他人がその人の代わりをすることはできない、またそれゆにこそ、人の行動を通してその人そのものが現

われ出てくる、という考えがあるからである。一人の人間は己れのすべてをかかえて絶対者・神の前に立っているのであって、他人のものを身に着けて神の前に立っているのではないという考えがあるからである。そのとき人は神以外では、己れに頼るしか方法はない。そこに森は孤独の本源を見、またその孤独ゆえにangoisse（不安）が生じると言う[10]。このアンゴワッスを埋めることは己れ一人では到底かなわない。それは己れが孤独であるというところから出ているものだからである。そのアンゴワッスの間隙を埋める一つの方途として異性を求めるのである。しかし二つのアンゴワッスをもった者が寄り添いあっても、アンゴワッスそのものは人間の存在そのものに付随するものであるから、それが消え去るということはないのである。それぞれがそれぞれのアンゴワッスを抱え、その二人が近づくことで、更に二人ゆえのアンゴワッスが生じることもある。しかし肉の交わりがたとえ一瞬であろうと、また迷妄であろうと、そのアンゴワッスを遠ざけてくれる。一時的消失しかもたらさないことを知りつつ、人はそこで互いを求め合う。飛躍を恐れず言うなら、宗教家もこのアンゴワッスを埋めようとしてその全エネルギーを神の探究に費やす。特に、神秘家はその過程で、一時的アンゴワッスの消去 —— 神との合一 —— の夢を味わう。

寄るべきときに二人は寄り添いながらも、各人のアンゴワッスの完全消去が不可能であることを意識するとき、「ほんとうの」恋愛が成立する。この「不可能性」は恋愛の営みが無駄であるということを意味しない。そうではなくこの営みを通して、人はそのアンゴワッスの消えゆくことの不可能であることを「知らしめられる」のである。個である人間は、その個を寄せ集めただけでは、この個のもつ孤独を解消することはできない。だが恋愛は二つのアンゴワッスの相乗的増加で終わるのではなく、この「不可能性」を通して、相手の「他」なること、自分とは違う存在であることを徹底して学んでゆくのである。だから充足した恋愛などというものは存しえないだろう。しかし恋愛の深まりによって、相手が他者であり、自分が相手にとっての他者であることを学びとる程度は向上していくであろう。われわれがこのように他者を志向するのは、他者が自己にとって、「神秘」だからである。その神秘は、それに接近することによって、簡単にそのヴェールが剥がれるものではない。近づけば近づくほど、その神秘はいわば神秘性を増すのである。またこの神秘は侵すものではなく、保持されるべきものであり、神秘にメスを入れることは冒涜とさえ映ろう。この侵すべからざる神秘性にもかかわらず、いやそれゆにこそ、その神秘なる他者 —— それも特に異性の他者 —— を人は求めてやまない。それは神秘なる他者が求めるに値するものであり、神秘を神秘のままに受け取るとき、エゴの根がわずかでも引き抜かれることを経験するからである。

だから何か「愛」がファッション化したり、共に居ることによってすべての問題が解決するかのように思い、二重三重のプラス・マイナス両方の庇護のも

とに安住するところに、「ほんとうの」恋愛は成立しないのではないか。とは言え、「ほんとうの」恋愛の成立には、どうしても個人や人格という西洋的考えが必要かどうかは、そう簡単には言えまい。というのも、同じ西洋においても、ややニュアンスの異なる言い方ながら、次のような発言を聞くからである。モーリャックは「人格はバルザックに始まる１９世紀の小説家の作り上げた仮説にすぎない」[11]と言ったと言う。つまりこの内部告発の根拠は、モーリャックが一貫して変わらぬとされる「人格」なるものも、神の介入によって一夜にして人が変わるという例をもって小説を書いているからである[12]。それならペルソナなる、人間の尊厳をそなえた「人格」概念と尊厳をもつがゆえに変化することなく、あたかも核のようにして、存続する「人格」とは区別されて考えるべきなのであろうか。われわれはもっと人格概念の根本に迫る必要があるのだろう。

註

(1) 以下の指摘は阿部謹也著、『西洋中世の愛と人格－「世間」論序説』、朝日新聞社、1992年、pp.187－191による。

(2) たとえば『こんてむつすむん地』巻第一、新村出、柊源一校註、『吉利支丹文学集』上、朝日新聞社、1970年、p.200. 他に、坂口安吾著、『恋愛論』、中村真一郎編、『恋愛について』岩波書店、1993年、pp.250－251. 参照。

(3) 前掲書　下巻、p.88.

(4) 阿部、前掲書、p.188.

(5) 前掲書、pp.42－53、77－93、参照。

(6) 前掲書、pp.87－88、94.

(7) Denis de Rougemont,L'amour de l'occident,Paris,1962(1939). 邦訳、『愛について』鈴木・川村訳、1959年、岩波書店。現在は上下二巻に別れて平凡社ライブラリーに入っている（1993年)。

(8) 阿部謹也著、『西洋中世の男と女』筑摩書房、1991年、特にp.159参照。

(9) 森有正著、『生きることと考えること』、講談社、1970年、pp.128－129.

(10) 前掲書、pp.130－132.

(11) 中村真一郎著、『愛と美と文学』岩波書店、1989年、p.227.

(12) 前掲箇所。